

我が国におけるマルティン・ブーバー研究の過去・現在・未来 —シンポジウムの総括文に代えて—

勝村 弘也

マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878–1965年) の思想をテーマとして、2010年5月15日に同志社大学の CISMOR が主催した若手研究会シンポジウム (共催: 京都ユダヤ思想学会、同志社大学神学部・神学研究科) は、我が国におけるブーバー研究の一つの新しい方向を指し示す出来事であるように思われる。このシンポジウムのもつ意味を、まことに僭越ながら筆者自身の体験や記憶をも交えながら歴史的に回顧するなかでとらえ直してみたい。なお2000年までの主要文献はM・フリードマン著、黒沼凱夫・河合一充訳『評伝マルティン・ブーバー下』(ミルトス、2000年) 400頁以下にまとめられているが、これらのすべての文献に目を通したわけではないことを断わっておく。

ブーバーの聖書解釈を長く研究してきた木田献一 (以下、敬称はすべて省略) を京都に招いてのシンポジウムの企画は、同志社大学および京都大学に在籍する大学院生や教員などユダヤ思想の若手研究者たちが、ブーバーの思想を21世紀初頭という現代の状況の中で再検討・再評価しようとする意欲的な試みの中から生まれた。彼の主著はいうまでもなく『我と汝 (Ich und Du)』(1923年) である——正確には、そのように考えられてきたと言うべきであろう。この書は、まず野口啓祐訳『孤独と愛』(創文社、1958年) によって紹介され、つづいて植田重雄訳が出た。少し時間をおいて、みすず書房からブーバー著作集 (全10巻) が企画されることになり、Ich und Du は、ドイツ文学者の田口義弘による翻訳 (1967年) によって多くの読者を獲得することになった。

我が国の思想界にブーバーを最初に紹介したのは、波多野精一であったともされるが、正確にはつきとめることが出来ない (なお、神学者のエミール・ブルンナーが一定の役割を果たしたことは十分に想像できる)。彼の生涯と思想の全体の輪郭を最初に紹介したのが同志社大学文学部教授であった平石善司であることは、間違いない。平石の名著『人と思想シリーズ ブーバー』(日本基督教団出版局) が出版された1966年頃までの時期を、ブーバー研究の黎明期、その後しばらくの期間を発展期と考えてよいであろう。筆者が京都大学に入学したのは1965年であるが、1回生の時にもっとも感銘を受けたのは、山本誠作の「宗教学」の講義であった。この中でブーバーの『我と汝』や『神の蝕 (Eclipse of God)』が丁寧に紹介された。しかしながら、記憶をたどるとブー

バーの思想について耳にしたのはこの時が最初ではなかった。われわれの一世代上の戦後に神学教育を受けた当時の若手牧師たちの口から、K・バルトやD・ボンヘッファーなどに交じってキリスト教会で確かにバーの名を聞いたのである。

バーの思想は、我が国における黎明期と発展期を通じて Ich und Du の解釈をひとつの軸としながら、20世紀前半に登場した一群の実存主義哲学者たちの系列の中で理解されてきたと思われる。暗示的なのは野口啓祐訳の書名『孤独と愛』が、ほぼ同じ時期にわが国に知られるようになったN・ベルジャエフの著書『孤独と愛と社会』に類似していることである——両者の思想的なつながりは、ベルジャエフの「客体化」批判がバーの「我—それ関係」に対する批判と類似していることや、「悪」「自由」に関するとらえ方に共通点が見られることによって確認されるのだが——。実存主義哲学者の中でバーが特異な位置を占めて来たのは、「対話的原理」を軸とした独特の哲学的人間学にあると言えるのであるが、このことは彼がドイツ語圏を代表するユダヤ人思想家であったことに加えて、ハシディズムという東ヨーロッパの民衆運動からの強力な思想的影響を受けていたこととも関係する。また彼がインドや中国（老荘思想）など東洋の文学や思想にも強い関心と深い理解を示していたことも特筆すべき事柄であろう。

バーの哲学的人間学や東西の神秘主義との関係については、我が国においてよく研究されてきたと言える。しかしながら、彼の社会哲学については、従来、十分に研究されて来たとは言えない——私見によれば、バーの人間学への批判は、彼の社会哲学を無視するか誤解しているところから来ている——。もっとも彼が独自の社会思想の持ち主であり、パレスティナの地における新しい社会実験というべきキブツに大きな思想的基礎付けを提供したこと、政治的シオニズムに反対してユダヤ人がアラブ人・パレスティナ人と共存する社会の建設を目指すべきであると主張したことなどに関しても、早くから知られてはいた。エンゲルスが「空想的」として論難した一群の社会主義者たちのいわゆる「ユートピア」思想を再評価すると共に、マルクスやレーニンの思想を中央集権主義であると厳しく批判する *Pfade in Utopia* の翻訳が長谷川進によって『もう一つの社会主義』（理想社）として出版されたのは、昭和34年つまり1959年である。バーによると、マルクスは革命という政治目標達成のために、本来彼が目指していたはずの社会主義社会建設の道からはずれてしまったという。革命後に起こるとされる有名な「国家死滅」の教説は（ロシア革命以後のソ連のたどった歴史や今日の中華人民共和国の実態に照らせば、それが「空想」であることは明白であるが）——それが厳密に言えばエンゲルスによって捏造されたものであったにしても——、結局のところマルクスが人間の社会というものをよく理解していなかったことの一つの証拠である。バーによると、マルクスは「社会的思考には稀にしか親しまなかった」思想家に他ならない。

ところで、1970年前後にみず書房からブーバー著作集が刊行された時期を、ブーバー研究の発展期と見るならば、この時期の中心地は明らかに京都であった。平石善司が同志社にいたことは先に述べたが、『我と汝』の訳者田口義弘は京都大学教養学部にあった。同じところに山本誠作もあり、1969年に『マルティン・ブーバーの研究』（理想社）を出版し、著作集では『教育論・政治論』などを担当した。なお『かくれた神』は、山本と三谷好憲 水垣渉の共訳である。三谷と水垣は京都産業大学にいた。水垣は京都大学文学部基督教学教室において有賀鐵太郎の薫陶を受け、周知のように後に同文学部教授となった。また『預言者の信仰』の訳者である高橋虔は同志社大学神学部教授であった。当時のブーバー研究の地平をよく示しているのは、著作集10の『ブーバー研究』の翻訳であるが、この書の訳者を見ると、山本、平石、三谷、田口、高橋に加えて高野晃兆がいる。彼も京大基督教学教室において有賀のもとで学んだ。京都がこの時期のブーバー研究の中心地であったことを疑う余地はない。

このような一種のブーバー・ブームの中で *Pfade in Utopia* は、長谷川によって『ユートピアの途』（平文社）として1969年に改訳が出版されている。筆者などの学園闘争世代には、ブーバーの著作に親しみその思想的影響を強く受けた者が多くいたはずであるが、ブーバーを専門に研究する後継者はあまり出なかった。その理由を分析することは、筆者には困難であるが、われわれの世代のブーバー読者には「聖書学」への志向が強かったことも一因であろう。また彼の社会思想に関して言うと、変革への情熱が満ちていた時代——黙示的雰囲気と言ってもよい——にはあまりにも穏健に見えたこと、さらにベトナム戦争やパレスティナ紛争の激化に象徴されるような世界政治の厳しい現実には照らして彼の社会哲学があまりにも理想主義的で空想的に見えたことなども関係するであろう。

しかしながら、その後ブーバー研究が継続されて来なかったわけではない。平石の周囲では、読書会のような形で研究が着実に続けられてきた。また、木田献一などヘブライ語聖書の研究者によって、ブーバーの聖書解釈に関する地味な研究が続けられてきた。この意味では『マルティン・ブーバー聖書著作集』（全3巻、日本キリスト教団出版局刊）の翻訳が出版されるまでの時期を、次の研究段階への潜伏期間と呼べるのかも知れない。この間に出版されたブーバー研究書の中で特筆すべきなのは、稲村秀一著『ブーバーの人間学』（教文館、1987年）である。稲村は1944年生まれであるから筆者と同じ世代に属する。彼の研究は、我が国における先人たちの翻訳を精密に比較検討しており、そのことだけでも評価に値するのだが、従来の研究に見られなかった新しい視点として少なくとも以下の2点が挙げられる。まず芸術論に関して論じていることである（ブーバーが優れた戯曲作家でもあったことに注意せよ）。さらに注目すべきなのは、5

篇の詩篇講解となっている *Recht und Unrecht* (1950年) に展開されている悪の問題に関するブーバーの思想が紹介されていることである。そこでは真理の逆を偽りとするヘブライズムの立場が明らかにされるとともに、このような偽りのことばを語る「神なき」現代の政治家が断罪される。そこには彼が対決していたイスラエル国家への痛烈な批判が見られる。この書の末尾には『神の王国』などの聖書に関する主要著作が十分に研究されていないことが、将来の課題として示されていて興味深い。

このような長い潜伏期間を経て、ある意味ではブーバーの思想の最高峰を示すとも言われる『モーセ』が2002年に出版された(この直前に『評伝マルティン・ブーバー』が訳されたことも意義深い)。この3巻からなる聖書著作集の第1巻『モーセ』の翻訳に関しては、偶然にも筆者と関係するある事件があったので紹介しておく。この実に難解な書の翻訳は、筆者の上司にあたる聖書学者の荒井章三(当時は神戸松蔭女子学院大学学長)によって進められて来たのであるが、出版間近になって難題に直面した。長く平石の指導を受けてきた二人の女性研究者、早乙女禮子と山本邦子も荒井とはまったく別に翻訳をほぼ完成していたことが判明したのだ。両者に面識はなかったのだが、早乙女と筆者は、旧知の間柄であったので荒井から仲介を依頼された。こうして、互いの業績を否定することがない形で双方の原稿が整理され3氏の共訳として『モーセ』が出版された。まさに「我と汝」の著者の思想に応じる出来事であった。その後、木田と北博によって『神の王国』(2003年)が、木田と金井美彦によって『油注がれた者』(2010年)が出版されることになり、ブーバーの聖書解釈に関する主要著作が出そろったわけである。これらの翻訳が若い研究者たちに及ぼした影響は大きかった。このことを以下に述べる。

ブーバーの哲学的人間学と彼の社会思想は、黎明期においてすでに紹介されてきたのであるが、両者がどこでどのように関連するのかについては、ほとんど理解されていなかった。そのためにブーバー本人の意図とは正反対に彼の思想は、現代社会に生きるわれわれには適用が困難な理想主義ではないかとの疑念がまとわりついていたのである。キリスト教徒の言う「旧約」、ヘブライ語聖書は、現代人が考えるような意味での宗教的文書ではなく、ある意味ではきわめて政治的な主張をもつ文書である(残念ながらこのことを十分に認識していない聖書学者が多い)。ブーバーの聖書解釈は、このような聖書そのものもつ思想性を現代的なコンテクストにおいて鮮明にしようとする一つの試みである。聖書が政治的文書であると言っても、もちろんその主張は深遠な人間理解によって基礎づけられたものである。それ故に、ブーバーの聖書解釈は彼の人間学と社会哲学や政治思想とをつなぐ鍵なのである。

ここに論文「聖書における神の直接統治の思想的意義——ブーバーの士師記解釈より

——」が掲載されることになった堀川敏寛は、これまでにブーバーのドイツ語訳聖書（ローゼンツヴァイクとの共訳）に関する緻密な研究を続けてきた若手研究者である。堀川は一方でブーバーの社会思想にも強い関心を示してきた。この論文では、ブーバーの士師記解釈に示された「神権（Theokratie）」の理念を解明するとともに、このような聖書に淵源をもつ「反王制」の思想が、彼の「協同組合」を単位とするユートピア社会主義とどのように関係するのかを論じている。ブーバーの預言者に関する著作にも神権の理念は展開されているので、それとのつき合わせが今後必要であろう。また「連合」の思想は、歴史的にはバリ・コンミュニョンの体験とも関連しているのであるが、ブーバーはこのことにあまり直接は言及していないようである。この意味では、ブーバーが高く評価しているプルドンやランダウアーの思想との関係を解明することが今後の課題である。

平岡光太郎の論文「現代ユダヤ思想における聖典と政治思想——マルティン・ブーバーの神権政治理解を中心に——」においても、堀川と同様、ブーバーの神権思想が論じられるのであるが、その切り口は大きく異なっている。平岡の場合、まず聖書が西洋の政治思想史の中でどのような役割をはたしてきたのかが問題になる。このようなコンテキストの中でブーバーの政治思想が現代のユダヤ人政治思想家によってどのように評価されているのかが論じられる。筆者には、特にモシェ・ハルバルタルによるブーバー批判の部分が興味深いだが、これは聖書学の立場からは「サムエル記の編集者の立場」と要約できるであろう。なお、木田献一の講演においても、マックス・ヴェーバーの宗教社会学に関して繰り返し言及がなされたのであるが、平岡論文はブーバーとウェーバーの思想的関連性についても論じており、当然のこととは言え重要な論点である。平岡は「アナキズム」については訳語を保留している。少なくともブーバーを論じる場合にこれに「無政府主義」という訳語を当てるのはよくないであろう。この語は「ユートピア社会主義」と同様、外側から非難の意味を込めて貼られたレッテルの側面を持っているのだが、アナキストである本人からすると必ずしも否定的概念ではない。政治的には中央集権国家を権力悪の表現として捉える「反権力的な思想傾向」を意味している。「無秩序」であるとの非難は、常に「管理」「連合」の思想を理解しない者の側から出されてきた（この理屈で行くと「ヨーロッパ連合」はアナキーということになるが、果たして現代のロシアや中国の方が優れた政治体制と言えるであろうか？）。

小野文生の論文「マルティン・ブーバーの聖書解釈における声の形態学——〈かたちなきもののかたち〉への問いについて——」は、従来ほとんど注目されることのなかったブーバーの思想とゲルマニスティックとの関連に焦点を当てた力作である。小野が指摘するようにブーバーが一級の聖書研究者であったことは、『神の王国』の序文や膨大な

注が雄弁に物語っている。筆者の考えでは、近代の聖書学は、啓蒙思想から来る流れとともに J・G・ヘルダー以来のロマン主義の流れという2つの大きな潮流の対立や融合から成り立っている。ブーバーの時代に聖書学の主流を形成していたのは、J・ヴェルハウゼンを代表者とする前者の流れであった。H・グンケルの場合は時代の子としてヴェルハウゼンの影響を強く受けていたが、ロマン主義的な感性をもった学者であったので神話・民話研究などの成果を聖書解釈に導入した。ブーバーが強く批判しているのは啓蒙思想の流れを汲む近代主義的な聖書学であって、聖書学一般を否定しているのではない。彼がペデルセンのような古代人の心性に深い理解を示す聖書学者を高く評価していることは注目される。小野論文は、ドイツ・ロマン主義が重視した「記憶」の概念をブーバーの思想を解明する一つの鍵として掘り下げて考察した優れた論考である。記憶に当たるヘブライ語は、語根 \sqrt{zkr} から派生したツィカーローンということになるが、これは普通「記念」と訳される（ゼーケルが「呼び名」を意味することにも注意せよ）。この語の重要性は、聖書における動詞 \sqrt{zkr} の用例を一瞥するだけでも分かるであろう。小野の指摘は、われわれ聖書学者が使用してきた「伝承」や「伝承史」の概念の再検討をも迫るものである。

紙面の関係でここでは堀川、平岡、小野論文にしか言及することができなかったが、今回のシンポジウムは参加者全員にとってまことに有意義なものであり、今後のユダヤ思想研究に大きな刺激と示唆を与えるものであったと確信する。